

顕正寺 由緒と経歴

当山は幡谷山破邪院顕正寺と号す。

開祖は幡谷城主 幡谷次郎左衛門信勝「唯信」 常陸の国茨城郡水戸城主江戸尾張守信義の子である。後に水戸城より約 30 キロ南の地に幡谷城を構え城主となった。

「親鸞のふるさと」から

親鸞聖人と顕正寺開基の「唯信」房との出逢いは、聖人の鹿島明神参りを抜きには語れない。同寺縁起をもとに、寺のおこりを探してみよう。

当時は藤原家宮司が鹿島に任官されるのがならわしであった。聖人も藤原家の流れをくみ、身寄りのない関東の地にあつて、その血脈を求めたことは想像できる。その上、鹿島神宮には、一切経が揃っており、その書見のために度々参詣したことは十分考えられる。また、鹿島、行方地方の教化もその大きな目的の一つであつたに違いない。

道順は、稲田―板敷山―石岡―霞ヶ浦北岸を経て鹿島へ抜けたとみられる。このコースには親鸞の遺跡が多い。その道筋に、橋村幡谷というところがあつた。

建保 4 年 (1216) 8 月 13 日の夜のこと

城の外を僧の一行がいる、城内に案内して夜を徹して教化を賜つた。親鸞聖人の「他力本願」の教えは、無常に悩む信勝にとって救いであつた。さっそく聖人の弟子となり法名(ほうみょう)を「唯信」と授かつたのである。

その後、貞永元年(1232)12月、聖人を請じ東茨城郡橋村幡谷の郷に一字を創建したのが、顕正寺(信願寺)のはじまりである。

幡谷次郎左衛門信勝「唯信」は、浄土真宗の開山である親鸞聖人の門弟二十四輩のうちの、第二十三座でございます。

ここからは「松平松井家御家譜録」より

顕正寺の歴史は子細がありまして、寺ならびに什物(じゅうもつ)は火災で焼失してしまい、総州(下総の国)葛飾郡下河辺の荘へ移り住むこととなり、寺一字を建立して往持してましたところ、天正年間、浄和様(松平安重やすしげ)が、武州(武蔵の国)騎西城に御在城された節「天正 18 年～慶長 6 年」1590～1601)心のこもった仰せをいただき、(いままでの)一ヶ寺は(そのまま)総州にあり、寺号を顕正寺と名乗り、次いで騎西城下へ召し出され、新たに一ヶ寺を建立しました。

- 1 (宝暦 9 年=1759) 総州古河へ御国替の節、泰嶺院様③「康官」(やすのり) 玄峰院様(④康房)の御廟を当寺の寺内へ御預けになられ、さらに浜田長安院に安置する御廟の御守護をも命ぜられました。近年(明和 6 年=1769) 松井松平家が国替にて再び当地(岩見国浜田)へ御戻り、浜田御帰城なされたので、御両所様(泰嶺院様。玄峰院様)の御廟は、長安院へ御移しになられました。このため、現在では、当寺に御廟などはありません。

天明 6 (1786) 丙午秋

顕正寺

松平松井家は、松平周防守康重を 1 代として 12 代康英 川越藩主で明治時代をむかえる。

松平松井家御家譜録 巻五に掲載 (平成 26 年 3 月 27 日 雨の日見つける)

しかしながら中略とあり、巻五は埼玉県内なし。